

国立台湾芸術大学との交流

河内利治（君平）

目次

- 一、はじめに
- 二、国立台湾芸術大学 (National Taiwan University of Arts)
- 三、学術交流協定書
 - 大東文化大学と国立台湾芸術大学との「書画短期研修」に関する覚書
 - 大東文化大学と国立台湾芸術大学との学術交流協定書
 - 大東文化大学と国立台湾芸術大学との学術交流覚書
- 四、二〇〇三（平成十五）年度「書道文化演習2」台湾研修
 - 《国立台湾芸術大学と大東文化大学との書画作品交流展》に寄せて
- 五、二〇〇四（平成十六）年度「書道文化演習2」台湾研修
- 六、個展「斎藤蒼青の書」開催
 - 国立台湾芸術大学校長黄光男博士「序」
 - 同書画芸術学系主任 蘇峰男教授「序」
- 七、おわりに

一、はじめに

書道学科では、三年次生のカリキュラムの一つとして「書道文化演習2（海外）」を開講している。この科目は、実際に中国や台湾など書道の伝統文化を有する国・地域へ出かけ、現地で直接、書道文化を含めた中国文化や台湾文化に触れてもらい、見聞を高め、視野を広げることを主たる目的としている。

前期は学内で事前研修を行い、後期分相当の授業を現地研修で学習し、通年4単位の科目として修得するものである。「事前研修」は、履修者各自が研究したいテーマを設定し、毎授業時、設定したテーマについて調査した内容を、演習形式で発表してもらうもので、事前指導の一種である。そして全員のレポートを簡易製本して冊子に仕立て、海外に持参し、折に触れて自分や同行の文章を読み直してもらうっている。市販のガイドブックにはない、手作りの参考書といった類のもので、相手校の大学にも一冊寄贈している。最後には、海外研修中の実体験や勉強の成果を踏まえて、「事後報告」としてレポートを提出してもらい、各自の達成感を確認している。

「現地研修」の具体的な内容については後述するが、一言で言えば、非常にハードである。毎日朝から夜までビッシリと実技、講義、参観、宿題のための自習などのプログラムが組まれているからである。引率者が高齢（？）のため、先にダウンしてしまうほどである。

海外の大学教員から、授業ごとに全員の成績評価をしてもらうことも初の試みである。その全評価と、事前研修、事後報告を総合して、最終的に単位認定することになる。このような授業は、おそらく同じ4単位科目の中で、履修がもっとも容易くない科目の一つであろう。しかし、それは単なる海外旅行とは異なり、大学教育の一貫として実施するだけに、本当に実りある授業でありたいと願うからである。

今まで実施した現地研修を簡単に紹介してみよう。

一回目の二〇〇二（平成十四）年度は、中国杭州の「中国美術学院」において、九月一日から一四日まで実施した。引率者は河内と河野隆助教授である。この実施内容については、河野先生の詳細な報告文——『西湖芸苑札記』（「大東書学」3）があるので再読願いたい。また、関連記事として、河野「西冷印社百周年大会」（「大東書学」4）、河内「中国美術学院『書法專業創辦四十周年および『創立七十五周年』の記念行事について」（同前）、河内「回想と交流——浙江美術学院国画系書法篆刻班留学の回想と大東文化大学書道学科との国際交流」（同前）もあるので、あわせて再読願えれば幸いである。

二回目の二〇〇三（平成十五）年度は、台湾板橋の「国立台湾芸術大学」において実施した。引率者は河内と斎藤公男助教教授である。しかし新型肺炎または非典型肺炎とされる、サーズ（重症急性呼吸器症候群）が発生したため、予定した夏季休暇中に実施できなくなった。そのため、後期も学内で授業を行うことになり、急遽カリキュラムを考え直し、履修者全員が、台湾故宫博物院所蔵の名品から書跡一点を選び、「双鉤填墨」法により模写し、それをもとに書作するという内容に変更した。何とかサーズが治まり、渡航許可が下りたので、春季休暇中の二〇〇四年三月二三日から二六日まで、三泊四日に短縮して行った。この実施は、すでに成績評価後の期間にあたるため、履修とは直接関係のない状態のものだったが、台湾芸大側が企画して下さった「筆歌墨舞——二〇〇四書画芸術国際交流展」という、大東大書道学科と台湾芸大書画芸術学系共催の国際交流展のお陰で、両校にとって非常に実りある研修になった。それはこの展覧会が、両校・両学科にとって、学生を主体とした初の試みの展覧会であったからである。その開幕式で、台湾芸大校長、王銘顕先生が、両校の「学术交流協定」の早期締結を希望されたことにより、その後の協定締結へと繋がる重要な行事でもあった。

三回目の二〇〇四（平成十六）年度は、同じく「国立台湾芸術大学」において実施した。引率者は河内と斎藤助教教授である。当初、中国と台湾を隔年で実施するつもりでいたが、二回目が変則的な形での実施であり、台湾ではまだ正式に書画短期研修を実施していないことから、春に続けて研修させていただいた。結果的に一年に二度（春季と夏季）、台湾芸大にお世話になったことになる。この折には、斎藤先生の個展——『斎藤蒼青の書』も授業と並行して学内で開催され、両校の絆をさらに深めることができた。

以上のように、二〇〇二（平成十四）年度からスタートして、わずかに三回実施しただけであるが、毎回実りある研修が行えたと自負している。

書画短期研修を実施する一方で、大東大は台湾芸大との学术交流協定を進めてきた。それは、教学面を主とする両行の今後のさらなる協力と、学生相互の留学制度の充実と発展を期すためのものである。

よって本稿では、二回目と三回目に実施した台湾研修の内容、および学术交流協定を中心に総括しておきたい。

二、国立台湾芸術大学 (National Taiwan University of Arts)

そもそも台湾芸大とはどのような大学であるのか、簡単に紹介しておこう。

所在地 〒二二〇 台湾台北縣板橋市大觀路一段五十九號

電話 (〇二) 一三二七二一―二八二 (代表)

前校長 王 銘顯 (二〇〇四年八月一日離任)

現校長 黄 光男 (二〇〇四年八月二日就任)

創立 一九五五年 国立芸術学校 (影劇・国劇・美術印刷三科)

一九六〇年 国立台湾芸術専科学校

一九六三年 夜間部増設

一九九四年 国立台湾芸術学院

二〇〇一年 国立台湾芸術大学 (八月一日校名変更)

二〇〇二年 美術学系から書画芸術学系が独立

協定校 サンフランシスコ州立大学芸術学院

オーストリア・ウィーン音楽学院

フランス高等美術学院

お茶の水女子大学、沖縄県立沖縄芸術大学

学生数 三〇〇〇人 (含む学部生・大学院生・留学生)

学位 学士・修士

教学機関 大学院 (研究所) 1・学部 (学院) 4・学科 (系) 13・夜間部 1

〔研究所〕 造形芸術研究所：中国書画組・西洋画組

〔美術学院〕 美術学系 (美術学科)

書画芸術学系 (書画芸術学科)

彫塑学系 (彫塑学科)

伝統工芸学系 (伝統工芸学科)

版画中心 (版画センター)

〔設計学院〕 視覚伝達設計学系 (視覚伝達デザイン学科)

工芸設計学系 (工芸デザイン学科)

多媒所 (マルチメディア所)

〔伝播学院〕 電影学系（映画学科）

広播電視学系（ラジオ・テレビ放送学科）

図文伝播芸術学系（図書文書放送学科）

応媒所（マルチメディア対応所）

〔表演学院〕 音楽学系（音楽学科）

中国音楽学系（中国音楽学科）

舞蹈学系（舞踊学科）

戲劇学系（演劇学科）

〔夜間部〕 美術学系（美術学科）

書画芸術学系（書画芸術学科）

戲劇学系（演劇学科）

工芸設計学系（工芸デザイン学科）

広播電視学系（ラジオ・テレビ放送学科）

特色

1 台湾国立の芸術（美術）大学中で、最も有名で、著名な芸術家が多数輩出。

2 最優秀の受験生を集め、伝統芸術を継承し新しい創作を重視する教育。

3 台湾初の造形芸術の大学院修士課程を設置。

4 国内外との芸術交流を強調し促進する。

5 理論と実践を結合するアカデミズムに溢れ、各学部が研究機関誌を刊行。

6 優美な芸術環境と豊富な文物図書資料の收藏。

三、学術交流協定書

右のような歴史、教学機関、特色をもつ大学において、「書画短期研修」を実施するため、まず次のような覚書を取り交わした。

大東文化大学と国立台湾芸術大学との「書画短期研修」に関する覚書

国立台湾芸術大学美術学系および書画芸術学系は、大東文化大学文学部書道学科が主催する「書道文化演習2（海外）」に参加する大東文化大学の学生のために、「書画短期研修」を提供することに同意する。両大学の合意事項は次の通りとする。

1. 授業時間と研修期間
研修期間中の授業時間は、課外研修を含め約60時間とする。研修期間は約2週間とする。（実施年の九月一日から一四日前後を予定とする。）
2. 研修目的と内容
大東文化大学学生の海外研修の目的は、中国伝統の書画芸術を学ぶことにある。よって、国立台湾芸術大学は大東文化大学の学生のために、中国伝統の書画芸術の実技および文房四宝の講義を目的とした授業と日華文化交流の機会を提供する。さらに文化や歴史に直接触れることのできる名所旧跡や博物館・美術館を含む学外研修を用意する。具体的な授業内容については、国立台湾芸術大学美術学系および書画芸術学系と大東文化大学書道学科が協議して決定する。
3. 成績評価
国立台湾芸術大学は正規の教学規則に基づいて、短期研修の各学生の成績評価を行い、その評定結果を大東文化大学に報告する。学生が研修で得た単位の認定は、大東文化大学がその責任を負う。
4. 宿舍および施設
国立台湾芸術大学は同研修に参加する大東文化大学の学生のために宿舍および必要な施設の手配について責任を負う。
5. 研修経費と見積書
国立台湾芸術大学は、予め大東文化大学に研修経費の見積書を提出しなくてはならない。両校の経費協議の決定を経た後、大東文化大学は学生から経費を徴収し、国立台湾芸術大学に支払う責任を負う。研修に参加する各学生は、個人的な支出に加え、研修費、宿舍費、食費、交通費、航空運賃、および送迎費を支払う。クラスの人数は20名程度とする。
6. 不測の事態対策
国立台湾芸術大学は緊急事態において救済処置を講ずる。但し、各学生は日本において旅行保険、医療保険および傷害保険に各自加入しなくてはならない。

7. 有効期限

本覚書の有効期限を5年とし、二〇〇三年四月一日より発効する。本覚書はその期間満了の六ヵ月前に両大学の一方から他方へ改定および終結の提案が無い限り、自動的に更新される。

8. 将来計画

今後、両校は協力して友好関係を継続し、教員の交流、学術研究や展覧会の交流、および長期留学生の交流を促進する。さらに両校は交流協定締結に向けて努力する。

9. その他

本覚書に定めのない事項が発生した場合、両大学は善意に基づいて協議し解決するものとする。

この「書画短期研修」のための覚書（二〇〇二年七月締結）をもとに、両校の「学術交流協定書」締結に向け、学内において次の趣旨と経緯により審議を経た。その概要は次のとおりである。

〈協定の趣旨〉

文学部書道学科および大学院書道学専攻が推進母体となった協定である。

- (1) 海外短期研修校として書道学科学生を派遣する。
- (2) 国立台湾芸術大学は交換学生を採用する場合、大東文化大学からの推薦者を優先的に考慮する。
- (3) 国立台湾芸術大学書画芸術学系卒業生が本学大学院文学研究科書道学専攻へ私費留学を希望する場合優先的に考慮する。

〈主な交流（経緯）〉

1. 二〇〇二年二月一日から三月三十一日まで、本学の書道学科教員（河内利治）が、国立台湾芸術大学の客座教授として、美術学院美術学系中国書画組および造形芸術研究所（大学院）において教鞭を執る。

2. 二〇〇二年七月に書道学科開設専門科目「書道文化演習2（海外）」に参加する本学学生のために「書画短期研修」を提供することに同意した『大東文化大学と国立台湾芸術大学との「書画短期研修」に関する覚書』を締結。同覚書第8条に将来計画として、「今後、両校は協力して友好関係を継続し、教員の交流、学術研究や展覧会の交流、および長期留学生の交流を促進する。さらには両校の姉妹校締結に向けて努力する」と明記。

3. 二〇〇三年九月一日～一四日に実施予定であった上記協定に基づく「書画短期研修」がSARSのために渡航不能となったが、国立台湾芸術大学が両大学生書画合同展「中日国際書画交流展」、交換授業、揮毫会、座談会、台湾故宫博物院・中央研究院参観などの特別プログラムを計画し、二〇〇四年三月二三日～二六日本学学生19名が参加。その折、国立台湾芸術大学の王銘顕校長が、本学との交流協定の締結を積極的に支持すると公言。
4. 二〇〇四年八月三〇日～九月八日まで「書画短期研修」を実施（29名参加予定）し、あわせて訪台期間中に本学の書道学科教員の「書道作品個展」を国立台湾芸術大学で開催する。
5. 二〇〇四年九月から、本学出身者1名が台湾芸術大学造形芸術研究所（大学院）に合格し進学する。
6. 二〇〇四年九月から一年間、大学院書道学専攻の院生1名が認定留学として台湾芸術大学造形芸術研究所（大学院）に留学する。

審議の結果、二〇〇四年七月、次の「学术交流協定書」と「学术交流覚書」が承認された。文学部書道学科、大学院文学研究科書道学専攻、国際交流センター等の関係機関各位に感謝申し上げる。

大東文化大学と国立台湾芸術大学との学术交流協定書

大東文化大学と国立台湾芸術大学は、両大学の友好関係を促進するため、この協定を締結する。

第1条 本協定は大東文化大学と国立台湾芸術大学の學術協力と教学研究の經驗交流を目的とする。

第2条 双方は自治と互惠平等の原則に基づき、友好協力関係の発展につとめる。

第3条 双方は上述の目的を達成するため、以下の交流事項を実施する。

- (1) 教学と研究成果の情報交流
- (2) 教員および研究員の相互派遣
- (3) 交換学生の派遣
- (4) 国際學術会議の開催
- (5) 學術研究計画の協力
- (6) その他の双方の理解と協力についての事項の促進

第4条 本協定の細則は、双方の代表が別に協議する。

第5条 本協定書は、両大学学長の署名捺印により発効する。本協定書は、調印から五年間有効とする。本協定書の継続及び修訂は、双方が協議する。一方が終結を希望する場合には、少なくとも六ヶ月前に他方に通知し、双方の合意を得て、協定を終結させるものとする。

第6条 本協定書は、日本語と中国語の各正本二部を作成し、双方が各一部を証書とする。

大東文化大学と国立台湾芸術大学との学術交流覚書

大東文化大学と国立台湾芸術大学は学術交流協定書に基づき、二〇〇四年から二〇〇九年までに執行する以下の交換学生
の派遣と教員および研究員の相互派遣の事項について同意する。

1. 交換学生の派遣

- (1) 双方の交換学生の人数は、対等と相互尊重の原則に基づき、実際の状況に則り双方が毎年協議する。
- (2) 交換学生の修学期間は、原則として一年以内とする。
- (3) 互恵平等の原則に基づき、もし大東文化大学が台湾芸術大学の各学生に、各学期間中、毎月の奨学金を提供するならば、台湾芸術大学もまた大東文化大学の学生に、各学期間中、毎月の奨学金を提供する。この奨学金は、受け入れ大学の奨学金政策の改変に因って取消または中止する。
- (4) 交換学生の入学時期は、受け入れ大学の学年暦（大東文化大学は毎年四月から翌年の三月、国立台湾芸術大学は毎年八月から翌年七月）に従う。
- (5) 双方は交換学生の就学に必要な情報（授業、学年暦、語学能力測定試験、保険費など）を提供する。
- (6) 交換学生は受け入れ大学の主要な語学の十分な能力を有するものとする。受け入れ大学は必要な語学能力の測定試験を実施する。この測定試験の費用は交換学生の自費とする。もし交換学生が語学能力を向上する必要がある場合は、必要な語学の授業を自費で習得する。
- (7) 交換学生の入学申請は、受け入れ大学の規定に則って行う。少なくとも入学時期の四ヶ月前までに提出する。
- (8) 交換学生の履修単位の認定は、受け入れ大学の成績証明書に則り、在籍大学の学則に基づき計算する。
- (9) 交換学生は留学期間中、在籍大学の学則に基づき、登録を行い、費用を納める。
- (10) 交換学生は、受け入れ大学の学則を重視し遵守しなければならない。受け入れ大学は、明らかに受け入れ大学の学則に適さない交換学生を送り返すことができる。

(11) 交換学生は留学期間中、受け入れ大学の授業料を免除する。その他の費用（申請書、旅費、雑費、宿舍費、医療保険、書籍、食費、個人支出、学外住居、余分な学校費用、語学能力測定試験と支出可能な語学授業の学費など）は本人負担とする。

2. 教員および研究員の相互派遣

(12) 双方は毎年教員および研究員を派遣して、相手大学において教学または研究に従事することができる。その人数については毎年協議する。双方は毎年派遣教員および研究員の人数と期間を同一にするよう努力する。

(13) 派遣教員および研究員の派遣期間は二から六ヶ月を原則とする。受け入れ大学は住居費を免除する。その他の費用（往復旅費、食費、生活費、保険費およびその他の費用など）は本人負担とする。

3. 付則

(14) その他、学生交換と教員および研究員の相互派遣に関する事柄は、両校が実情に合わせて別に相談して決定する。

四、二〇〇三（平成十五）年度「書道文化演習2」台湾研修

まず、「事前研修」のテーマは次のとおりである。

志村 恵美 毛公鼎について

小泉 徳子 毛公鼎

古屋 健太郎 毛公鼎（金文）の芸術性

北里 朴大 散氏盤

庄村 真琴 散氏盤について

渡邊 美穂 快雪時晴帖

遠山 美子 快雪時晴帖

安住 麻里 書譜

堀田 佳代 孫過庭書譜―王羲之書法の最も忠実な継承者

小池 麻美 書譜

小林 葉月 書譜の内容について

三浦	枝里子	顔真卿祭姪文稿
柳下	あゆみ	顔真卿祭姪文稿
藤原	純子	懷素自叙帖
鈴木	瑞歩	蘇東坡—黃州寒食詩卷—
辻	洋子	黃庭堅
長嶺	百合香	黃庭堅
武	加奈子	寒山子龐居士詩
竹下	沙織	黃庭堅「寒山子龐居士詩」について
高田	由美子	米芾蜀素帖
竹内	香代	米芾蜀素帖
佐川	智紀	米芾蜀素帖の字形の特色
得丸	奈美	米芾の理論と書の一致

三月二三日から二六日まで、春季休暇中を利用し、三泊四日に短縮して行った。サーズで「書画短期研修」に参加できなかった、学生諸君の「何とか短期間でも台湾に行きたい」との熱い要請を受け、実施したものである。そのため最初は単なる観光旅行気分で作画したが、台湾芸大から、「大東大と台湾芸大の師生の合同展を開催したい」という朗報が飛び込み、急遽、学生諸君の課題作品を郵送した。表具、陳列、作品集の発行まで、すべての業務を台湾芸大側が手配し、開催してくださった。非常に有難い話であり、光栄に感じた展覧会であった。本展開催にあたり、河内は次のような一文を草した。

《国立台湾芸術大学と大東文化大学との書画作品交流展》に寄せて

このたび国立台湾芸術大学との国際交流の一環として、大東文化大学大学院書道学専攻並びに文学部書道学科の師生の書法作品二十二点を一堂に会した展覧会を開催できますことは、誠に有意義な作品発表の場の一つであると考えます。

大東文化大学の出品作品は、河内の大学院書道学専攻の授業「中国書学・書法特殊研究」と書道学科3年次の授業「書道文化演習(2)」の受講生(院生1名と学生19名)が、「台湾故宮博物院および台湾個人蔵の書跡を対象として、双鉤填

墨によって模写技法を修得した上で、書法作品化を目指す」という課題を通じて、真跡の全部または一部を自由な形式で表現したものです。古典の形式と内容を踏まえ、伝統を現代に生かすことを目標にした、書作の在り方を研究するものです。

大学における授業時の、学生諸君の真摯かつ熱心な制作活動の一端を、本展のような形で展覽頂けることは、学生一人一人の喜びであると同時に、教師としての喜びでもあります。

書法芸術を専業とする台湾と日本の高等教育機関における師生の交流展は、両校の歴史に新たな一頁を書き加えるだけでなく、国際的な芸術交流の一翼として、将来に更に大きな進展を期待できるでしょう。この交流展はその記念すべき第一歩であると信じております。

本展にご来駕下さった、国立台湾芸術大学造形芸術研究所と書画芸術学系の師生、ならびに多くの芸術愛好家の方々に感謝申し上げますとともに、王銘顕校長、蘇峰男主任、林進忠処長をはじめ、本展を運営し開催下さった関係者各位に衷心よりお礼申し上げます。

この「筆歌墨舞——二〇〇四書画芸術国際交流展」に出品した大東大側の師生の氏名、作品タイトル、サイズ（縦×横、単位センチ）を列記しておきたい。

志村	恵美	節臨毛公鼎	1	3	5	×	35
長嶺	百合香	節臨松風閣詩卷	35	×	1	2	3
藤原	純子	節臨自叙帖	33	×	67	・	2
鎌田	美里	臨王鐸七言古詩	33	・	5	×	66
渡邊	美穂	臨快雪時晴帖	43	・	5	×	26
得丸	奈美	節臨蜀素帖	33	×	24	・	5
武	加奈子	節臨寒山子龐居士詩	31	・	5	×	85
竹内	香代	節臨蜀素帖	30	×	58	・	2
辻	洋子	節臨松風閣詩卷	35	×	1	1	4
竹下	沙織	節臨寒山子龐居士詩	35	×	70	・	6
柳下	あゆみ	節臨祭姪文稿	37	・	2	×	30
							・ 8

安住	麻里	節臨書譜	33	・	5	×	24	・	5
小林	葉月	節臨書譜	30	・	2	×	22	・	5
佐川	智紀	節臨蜀素帖	35	×	26	・	6		
小池	麻美	節臨書譜	28	×	18	・	8		
遠山	美子	臨快雪時晴帖	83	×	35				
高田	由美子	節臨蜀素帖	28	×	52				
古屋	健太郎	節臨毛公鼎	1	3	5	×	35		
小泉	徳子	節臨毛公鼎	1	3	5	×	35		
北里	朴大	節臨散氏盤	1	3	5	×	35		
斎藤	公男	龔自珍詩	1	3	5	×	35		
河内	利治	臺北東京両板橋	1	3	5	×	35		
		記遊板橋自題詩	1	3	4	・	5	×	33
									5

大東大の出品作品の質の高さと、臨模という制作態度に対して、台湾芸大から高い評価を頂戴した。その成果も起因すると思われるが、全56頁オールカラー版の『筆歌墨舞——二〇〇四書画芸術国際交流展作品集（国立台湾芸術大学・日本大東文化大学）』が六月に出版され、直ちに日本へ30部も郵送して下さった。蘇峰男先生に後からお聞きした話によると、この図録の出版経費は、台湾政府教育部国際文教処によるもので、台湾芸大からの申請でもなかなか通らないものであるとのことであった。

本展は、さらに台湾芸大の計らいで、台北の華梵大学、桃園の万能科技大学においても巡回展示され、特に万能科技大学では、五月一三日から三一日まで、同大学の創意芸術中心で開催して下さり、図録『筆歌墨舞——二〇〇四中日書法交流展（国立台湾芸術大学・日本大東文化大学）』まで発行して下さった。また、台湾の雑誌『藝術家』348号にも紹介文を掲載していただいた。本当に至れり尽くせりである。

この訪台期間中の活動内容を、メモ書きと記憶によって整理しておく。

三月二三日（火）

書道学科一期生の卒業式の翌日、10時発の日本アジア航空EG201便にて台湾へ旅立つ。

三月二四日（水）

ホテル三徳大飯店から台湾芸大へ直行し、終日交流活動を行う。9時歓迎式。9時40分王銘顕校長に拝謁。10時10分から交換授業2コマ（50分×2）。河内は「書道と漢字」、斎藤先生は「書の美の要件」について台湾の学生（書画芸術学系一年生）に講義。一方、大東大の学生が受講したのは、林進忠先生の「書法文字的本相」の講義、林隆達先生「書法」と杜三鑫先生「篆刻」の実技授業。12時昼食。台湾の学生手作りの「餃子」に歓声があがり、感動と美味にみんな満腹。13時30分から「筆歌墨舞——二〇〇四書画芸術国際交流展」開幕式。王銘顕校長が両校の「学術交流協定」の早期締結を希望される。その後、引き続き15時まで両校学生入り乱れての「揮毫会」。15時10分から16時まで二回目の交換授業。河内は台湾の学生（書画芸術学系四年生・造形芸術研究所一年生）相手に午前と同様の講義、大東大の学生は蘇峰男先生の「水墨画」実技指導を受講。16時10分から「座談会」。この席で小泉徳子君が、異文化を直に体験したためか、自分の感想を述べようとして言葉にならず、感極まって涙に声を震わせながらお礼の気持ちをしっかりと一言づつしてくれた。彼女の涙を見て、今回の研修旅行を企画して心から良かったと実感する。

三月二五日（木）

9時に故宮博物院到着。台湾芸大から公式文書を頂戴し、入場料金ならびに参観ガイドを特別に手配していただく。故宮では黄華源氏が引率してくださる。学生諸君は各自が模写した対象の書跡がほとんど展示されていなかったため、落胆の色を隠せなかったが、特別展示「筆有千秋業——書法的発展」「新視界——清代前期宮廷絵画」、一般展示「邦国重器——中国古代銅器精華」を中心に熱心に参観していた。昼食後、中央研究院歴史語言研究所「歴史文物陳列館」と中央研究院「嶺南美術館」の見学。林錦濤氏がここから引率交替。嶺南美術館所蔵の絵画作品は、欧豪年先生（中国文化大学教授・台湾芸大兼任教授、一九三五年生、広東茂名人）が寄贈されたものと拝聴する。また全員に嶺南美術館特製の杯子（ふたつきコップ）が贈られ拍手喝采。その後、その欧豪年先生のご自宅「画館」へ、全員で訪問させていただく。欧先生は、逝去された江兆申先生と並ぶ日本でも有名な書画家である。『欧豪年作品集』（二玄社刊行と同じもので台湾時事文化出版事業有限公司出版）を頂戴する。先生は多くの書画を収蔵しておられ、張瑞図の長条福や文徵明・黄道周・王鐸の扇面などを特別に拝見する。部屋には到る所に有名な書画が掛かっている。呉昌碩の「山高水流」が印象に残る。二〇〇二年三月に、欧豪年先生への唱和詩「石斎昌碩墨香濃、関雪豪年絶世容。清話芳餐無限意、擎天芸海復相逢。奉贈欧豪年大師、壬午春

日河内君平書」と扇面に書いてお贈りしたことがあるが、その拙作を表具して所蔵され、全員に紹介して下さった。作品の出来栄えはともかく、こういう在り方こそが、伝統的な文人スタイルであると実感する。小雨振る中、ご厚情を胸に抱きながら夕食へ向かう。食後はエステに行く者、士林夜市に行く者などに分かれて自由行動。ホテルに戻ると一名ダウン。急遽ホテルの近くの病院に救急往診。単なる疲労であったが、思わぬハプニング。引率はやはり最低二名必要である。就寝したのが3時であった。

三月二十六日(金)

ハプニングも何のその、10時にホテルを出発し、お昼に中正国際空港に到着。13時50分発の日本アジア航空EG204便に搭乗、全員無事に18時前に帰国。

五、二〇〇四(平成十六)年度「書道文化演習2」台湾研修

八月三〇日から九月八日まで、十日間実施した「書画短期研修」は、「学术交流協定書」と「学术交流協定覚書」を取り交わし、正式に姉妹校関係となった最初の活動である。この活動内容を、每晚就寝前にパソコンに打ち込んだ日記により報告しておきたい。もと「台湾夏季研修報告文」として大学に提出した文章を加筆訂正したものである。

まず、学生の「事前研修」のテーマは次のとおりである。

池田 和嘉子	青銅器(西周を中心)
岩戸 志保美	散氏盤
梅田 悠希	台湾の書道
草地 泰大	書論として書譜から学ぶもの
末岡 沙織	故宮博物院の歴史と背景
田中 沙耶	台湾の芸術・陶磁器について
塚田 佳代	台北故宮博物院の成り立ち
富山 由紀	「鶯歌」台湾陶磁器も街
中村 拓也	殷代銅器について
山本 正樹	米芾について

横田	ちえみ	言語のルーツ
林	雲峰	台湾へ行きたい
氏家	真	台湾の歴史
大藪	香	台湾の気候
菊池	奈津美	フルーツ天国台湾
小島	慎哉	董其昌について
鈴木	美香	台湾の食文化について
高橋	奈々	玉の神秘性と謎
田中	葉子	米芾から刺激を…
津留	有耶子	台湾の文化と生活習慣
中村	裕子	台湾の温泉について
橋場	真実	食在台湾
平井	宏美	山水画について
前田	慎之介	米芾と蜀素帖について
三上	絢子	気候と書の表現
渡邊	由梨	台湾最大の夜市「士林夜市」
薛	中超	山水画と書における「無味」について
伊藤	絵美	懷素と自叙帖について

右学生に加え、大学院文学研究科二年生の鎌田美里君（台湾芸大への交換留学生）、一年生の藤田尚美君、大東大中国文学科卒業生の香取潤哉君（台湾芸大大学院入学生）の三人も受講した。

実際にご指導くださった先生は次の方々である。

蘇	峰男	花鳥	教授	筑波大学客員研究員
羅	振賢	山水	教授	

林	進忠	書法	教授	筑波大学芸術学修士
林	隆達	書法	副教授	
劉	素真	台湾美術	助理教授	筑波大学芸術学博士
杜	三鑫	篆刻	兼任講師	筑波大学芸術学修士
薛	志揚	篆刻	兼任講師	台湾芸大造形芸術研究所修士

またご助力いただいた助手と学生諸君も、特に列記しておきたい。

書画芸術学系助手	陳 重亨	・	林 淑芬
書画芸術学系学生	洪 禎蔚	・	范 郁瑄
	蔡 如盈	・	游 雯迪
		・	陳 有德
		・	陳 芃宇

八月三〇日(月)

台風16号の影響を心配しながら、空港に向かう。埼京線が40分の遅れで、全員集合が定刻の8時を少し回ったが、無事に教員2名、学生29名がそろそろ。結団式を行い、全員健康で無事帰国できるよう話をする。西城研君が医薬品、台湾芸大へのお土産を持って見送りに来てくれる。10時発の日本アジア航空EG201便が、定刻から30分遅れで飛びたち、台北中正国際空港に13時に到着。留学中の大東大卒業生香取潤哉君、院生で交換留学生の鎌田美里君が出迎えてくれる。旅行社のバスに乗り込んだのが14時。換金のため、民権東路にある免税店にたちより、15時半に台湾芸大に到着。書画芸術学系主任蘇峰男教授、研究発展処処長林進忠教授の出迎えを受ける。最初に宿舎に荷物を運び込み、17時から諸注意。シート、枕、枕カバーを蘇先生ご自身が買ってこられたという。そのほか、コップ、シャンプルー、ボディシャンプー、歯ブラシ、歯磨き粉も、すべて蘇先生の手配と聞き感銘を受ける。この宿舎(女一宿舎)は女子学生の宿舎で、本来は男子禁制。われわれ大東大のために、特別に使用許可とのこと。17時半、学内の食堂「義大利餐廳」で夕食。この食堂も夏休み中であることを特別にわれわれのために提供してくださったとのこと。学生諸君は19時から一時間半ほど、「板橋観光夜市」に出かけ、最初の観光を行う。その間、河内、斎藤両名は、蘇先生、林先生と明日の打ち合わせを行う。21時に学生の様子を伺いに宿舎へ行く。

八月三一日(火)

昨夜は冷房がなく、扇風機だけの暑い部屋で、蚊やゴキブリと戦いながら一夜を過ごした者もいた。朝食7時半(60元)、昼食12時(120元)、夕食17時半(120元)の三食とも食堂で食べる。初の食事で、トラブルが発生。朝7時半、食堂に学生は集合したが、シェフが来ていない。ボランティアの台湾学生が連絡すると30分ほど待って欲しいとのこと。結局、8時過ぎに朝食となる。牛乳、トースト、ハムエッグと外で買ってきてくれた玉米餅の食事。その後、遅れて来た理由は、ガスコンロの問題と判明した。10時、黄光男校長に面会。王銘顕前校長の後を受けて、八月二日に校長に就任されたばかりである。台湾芸大のご出身で、ご専門は中国画と美学・芸術学と承る。前任は国立歴史博物館館長。国際化を第一重点項目に掲げられており、われわれにとって非常にありがたい方針である。今回は学術交流協定を結んで最初の活動となるため、大東大との交流を積極的に支持するとの発言に真実味がある。10時半、総合大樓3階で、「大東文化大学書画短期研修」の開訓典礼(始業式)。昼食後、13時から14時45分まで、助理教授劉素真女史の「台湾美術」の講義。「全国展」と「全省展」の二つの公募展の図録を見て問題点を提起し、それに答えるという進め方。最後にスライドで台湾の書画家の作品を紹介し、問題点と関連し補足する。先生の教育方法が、学校教育の中で如何に大切であるかという点を実証的に痛感した。休むまもなく、この日のメインイベント、「斎藤蒼青書法展」の開幕式が15時から書画芸術学系棟地下1階で開催。斎藤ゼミの学生一同から、特別に記念品贈呈があり、先生は感極まって涙ぐんでおられた。17時半夕食。蚊取り線香の台がないため、蘇先生が針金を自ら工作して部屋数分配られた。

九月一日(水)

7時半朝食。8時半から蘇先生の「花鳥画」の授業。四君子の中から「竹」についての講義と実技指導。竹の性質はそのまま人間性の象徴であるとの説明。「直(まっすぐ、正直)」、「虚心(中が空洞、虚心坦懐)」、「節(節度、貞節)」のシンボライズされたのが君子であるとのこと。12時昼食。1時半から「菊」の実技指導ならびに「藤花」の彩色画実演。竹か菊の画を一枚仕上げることが課題。斎藤先生も学生に混じって練習される。「難しい」、「面白い」といった体験を積む。5時半の夕食前まで、全員が頑張って何とか1枚提出する。本来ならば一ヶ月の内容を、わずか一日で消化する。全員よく描けているとお褒めの言葉をいただく。夕食後、6時半に公共バスと地下鉄を乗り継いで、北投駅まで全員移動。送迎ワゴンに分乗して新北投の「花月温泉生活館」に到着。蘇先生のポケットマネーで、29名が温泉を初体験。帰りが遅くなり、地下鉄の新埔駅に着いたのが23時15分前。22時20分の終バスに間に合わず、タクシー8台に分乗し、全員無事に大学に帰り着く。宿舎へ書画芸術学系からの差し入れがあり、ジュースと焼餅に感動。(河内と斎藤先生の二人は、先回り

して「花月温泉生活館」に到着。蘇先生の予告なしの宴席に出席。蘇先生の友人を含め10人の円卓で、参加者は台北市政府警察局長の北投分局局長はじめ警察官の方々であった。）

九月二日（木）

朝食に初めて中華。西洋料理ばかりだったのでありがたい。この日は昼食も夕食も中華だった。8時半から12時前まで、林進忠教授の「書法」の授業。一日かけて隷書と草書を学ぶ。隷書は、台湾の書家、丁念先氏の対聯、漢碑五種（西岳華山、曹全、礼器、史晨、張遷）、秦青川木簡、上海博物館藏戰国楚簡、鄧完白の対聯を資料として「臨書」を学ぶ。草書は書譜の対聯五種、張大千氏の対聯、「寒生烟柳綠、風定雪梅香」の対聯制作（これだけは、林先生が事前に字書から集められた各字を組み合わせて制作する）。蘇軾が引いた張融の書論「不恨臣無二王法、但恨二王無臣法」（『東坡題跋』卷四「跋山谷草書」）を林教授は引用し、自己の書風を確立することの大切さについて講じる。台湾芸大では、一、二年生は臨書、三、四年生は創作とはつきり分けている。臨書の段階では、徹底的に「似る」ことを要求する。字形、筆使い、空間（章法）の三点から追求する。しかし創作の段階では、鄧完白が漢碑を学んで最終的に自己の書風を確立したことを例に挙げ、臨書と創作の関係を強調し、芸術性の追求が最終目標であり、創作を第一に重んじており、古典にそっくりの作品を評価しない。授業などの先生のお手本にそっくりの作品も評価しない。学生同士似ている場合も評価しない。古典の臨書を通じて、すべて自分で判断し選択し、最終的に自分のものが表現されているものを評価する。大学は、この研究方法を教える場であり、学生個人の目標を定めることを指導するのが、教員の役割である。「私の財産は学生です」という言葉は、林先生の至言である。なかなかここまで言い切れるものではない。こういった先生の指導があつてか、大東の学生は、朝から夜9時まで必死になって1枚（半切2枚または全紙1枚）を仕上げた。さすがに精神的プレッシャーを受けたようだ。しかし、若者はやはり若者で、作品を仕上げた後、板橋市内までタクシーを飛ばしてカラオケに行った者が半数以上いた。授業中、知人の台湾の書家、李憲専ご夫婦が見学を訪れ、熱心に書いている姿や、教室一面に張つてある作品の技法の習得レベルを見て感心されていた。

九月三日（金）

中日の5日目。斎藤先生の個展を参観するため、先生の令夫人、同道3人が来校される。（斎藤先生一行は香取君を伴い、終日台北市内観光。）この日は「篆刻」と板橋市内の学外見学の授業。午前は杜三鑫講師が、台湾篆刻史の講義、課題「永壽」の草稿の添削と側款の乾拓の採り方の説明。午後は薛志揚講師の刻法の実演。朱文「心畫」の細部の刻しかたを、書画カメラを通して全員に見せてくれる。その上手さ、速さに圧倒される。15時半に大学を出発し、清朝末期の林氏の屋敷

「林家花園」と板橋國小にある日下部東作（鳴鶴）書「枋橋建学碑」の見学。17時過ぎに戻り、夕食をはさんで22時過ぎまで、河内が篆刻の補習指導をして、学生はなんとか課題を仕上げる。

九月四日（土）

8時半にマイクロバス二台で大学出発。9時半から、先ず中央研究院歴史語言研究所「歴史文物陳列館」の見学。院生の藤田尚美君は同院所蔵の「居延漢簡」を見るために台湾に来たようなものなので、ずっとこれだけを熱心に鑑賞していた。昼食は、黄華源先生の手配で、地鶏や野菜を中心とする農村料理。待望の故宮博物院に13時半到着。3年間かかる予定の大規模修復工事のため、展示が三分の一以下に縮小されている。「毛公鼎」、「散氏盤」などの展示はあったが、書画ではほとんど著名な作品が見られなかった。そのため「于右任墓園訪碑」の予定を変更し、15時から三十分間ゆっくりと「張大千記念館」を見学。現在故宮博物院の管理下であり、事前申請が必要などころを、故宮博物院展覧組の林宏煒先生の差配で特別に参観させていただく。張大千（一八九八〜一九八三、享年85歳）が生前住んでいた場所をそのまま記念館にしてある。大客間には料理表が掛かっている。グルメで知られる大千ならではの。この一点だけが直筆で、後の全ての書画は複製品と聞く。画室には大千が逝去した時刻、午前8時15分を示す時計が掛かっている。中庭には磁石性のある奇石、裏庭には墓碑「梅丘」のほか草花や鸞など、まるで植物園と動物園がいっしょになっているようである。裏庭から眺めると、この地が双溪の分岐点に位置するのがよくわかる。さらにプログラムを一つ追加し、週末の交通渋滞のなか、淡水ハーバーを見学する。夕日には少し早い、潮の匂いを嗅ぐ。夕食は「烤肉（バーベキュー）大会」。蘇峰男先生の生家が淡水鎮山子頂10号にあり、日本語を自在に操る84歳のご母堂がご健在で生活されている。学生が木炭から火を起こして肉やトウモロコシを焼き、日台一致協力して食事をする様子が非常に微笑ましく感じる。夜遅くまでカラオケに興じさせていた。

九月五日（日）

9時に観光バスで大学を出発し、10時から「台北県立鶯歌陶磁博物館」を見学。一般展示と特別展示の「台湾阿泥—陶磁娃娃特展」を参観。11時に「台華窯画陶」に移動し、素焼きされたコーヒーカーップとお皿のセットに絵付けをする。学生諸君は陳士侯先生の簡単な絵付けの仕方の説明を聞いたあと、お弁当を食べてから、思い思いの絵柄を絵付けする。画陶（陶器の絵付）をする場合、「顔料（鉱物性のもので、水彩画の植物性顔料と異なる）」、「甘油（光沢性を發揮する）」、「膠（描いた後こすっても色が落ちない効果を持つ）」の三者を混ぜたものを絵皿に溶いて使用する。色は大体二、三〇色あり、紙に描くのとほぼ同じように描くことができる。文字は通常、「青花」という色を使う。字を書く者、絵を描く者、

書画両方を描く者とさまざままで、プレゼントする相手、祖父母、父母、友達、自分へのそれぞれへの思いをこめて熱心に仕上げる。14時終了。お土産の陶磁器を購入した後、「三峡祖師廟」を参拝する。ボランティアのおじいさんが、立て板に水の日本語で案内してくれた。この廟は、二六〇年の歴史を持ち、三峡清川の土地神として祭られてきた。三度の修復を経ているが、最後の修復からすでに三十年を経過し、その時は台湾芸大美術系の李梅樹先生が中心となって、石柱彫刻、レリーフ、木彫の神々を仕上げたという。蘇主任教授が助手としてお手伝いし、林進忠教授はまだ入学していなかった頃のことである。16時から20時まで「大板根森林温泉渡假村」で温泉と夕食を楽しむ。21時に大学に到着。この日はのんびりした一日で、学生はバスの移動中に睡眠不足を解消できたようである。

九月六日（月）

翌週の十四日から新学期が始まるので、ぼつぼつと学内に学生が増えてきた。8時半から羅振賢教授の「山水画」の授業。午前中はスライドによる講義と実演。黄山の雲海、ナイヤガラの滝、台湾の棚田などの写真、墨のスケッチ、制作した作品のスライドは百枚以上あった。実技では、先生は黒板に毛氈を敷き、その上に紙を乗せて立ったまま描かれる。自宅でも教室でもいつも大きい作品は立って描くとの事。その方が「氣」が伝わるとおっしゃり、簡単な「氣功」を授業終了後に小生に教えてくださった。午後は松樹の描き方の練習。台湾師範大学教授杜忠誥先生が来校されたので、大東大の学生に紹介し、旧交を温める。夕食後、学生の中には台北の原宿と呼ばれる西門へお土産を買いに行く者もいた。

九月七日（火）

林隆達副教授が、もう一つの書法の授業を指導。楷書、行書、篆書の実演を午前中に行い、午後は好きな古典を選んで1点を半切に制作。プラチナで書いたという先生の書「小楷般若心経」に学生一同感嘆の声を挙げる。18時からお世話になった台湾の先生方と学生を招待して「致感会（答礼の宴）」を催す。学生は三つに分かれて、中国語で日日の様子を語り、歌を歌い、組体操をお見せする。河内も自詠「相見歡——甲申九月率大東文化大学生旅台研習奉謝台湾芸大師生二首」の七言絶句二首を披露し、黄華源氏に台湾語で吟詠して頂く。その詩は次のとおり。

遅日中元重遇時、詩書画印学生熙。大東台芸両相契、歩歩登高定有期。

双溪三峡夕陽看、淡水鎮山如月宮。調息養生心力尽、家鄉何独在扶桑。

九月八日（水）

台風18号の影響で、13時30分発予定の日本アジア航空EG204便が、17時10分に変更になり、急遽オプションを考え、午前10時から「総統府」の参観を加える。これは林隆達先生の手配による。黄光男校長にまずお別れの挨拶をする。一番お

世話になった書画芸術学系の陳重亨、林淑芬両助手が小雨振るなか見送ってくれた。9時半大学出発。總統府参観後、林隆達先生の知り合いの牛肉麵店でお腹を満たし、博愛路にある新東陽へみんなでお土産を買いに行く。13時に空港へ向け出発。ここで台湾の学生と別れる。別れるのが辛く、なかなかバスに乗車しなかった。定刻通りにフライト。21時に成田到着。解散。JTBに手配してもらったバスで都内へ。上野、池袋、東武練馬でそれぞれ下車。何とか全員無事に帰宅できた。

なおこの交流内容については、「国立台湾芸術大学校刊」第395期（二〇〇四年九月三十日発行）、「国立台湾芸術大学通訊」第12期（二〇〇四年十月発行）および国立台湾芸術大学書画芸術学系のホームページ（<http://www.ntua.edu.tw/~cart/>）の「二〇〇四年日本大東文化大學來台研習書畫新聞稿」に詳細な報告記事が掲載されている。

六、個展「斎藤蒼青の書」開催

八月三十一日に挙行された斎藤先生の個展は、大成功であった。個展にあわせて刊行された作品集から、黄光男校長先生と蘇峰男主任教授の文章を転載させていただく（両序ともに河内翻訳）。

国立台湾芸術大学校長黄光男博士「序」

このたび、大東文化大学と国立台湾芸術大学は、学术交流協定を締結し、手を携えて助け合う、親しい関係の姉妹校となりました。両大学は国際化の発展を促進して學術水準を向上させるという、大きな世界と共通の理想を有しています。近年、大東文化大学の河内利治教授は、国立台湾芸術大学客座教授として招聘されて教鞭を執り、教職員や学生から好評を博しました。またその後、斎藤公男教授と共に学生を引率して来校され、交換授業、合同展覧会、揮毫会、座談会などのプログラムを実施されました。

さらに両大学の教員と学生による「中日国際書画交流展」が台北県政府文化局の招聘で開催され、台北県文化中心および国立台湾芸術大学、華梵大学、万能科技大学の三大学で巡回展覧されました。この展覧会は、両大学合作によって実質的な誼を深め、教学の成果と學術研究の水準を向上させました。現在では、大東文化大学の交換学生と留学生が、国立台湾芸術大学で学んでいます。

斎藤公男教授は、蒼青と号し、多年に亘り書学を研鑽し、書法史論と創作理論に精通しておられます。その作品は高い境地を具現し、神彩靈妙な世界を湛えており、現代日本書壇の傑出した中堅作家であります。今夏、河内教授と共に二十九名の大東文化大学の学生を引率して再訪され、国立台湾芸術大学において十日間の「書画短期研修」の教学交流を実施されます。

国立台湾芸術大学の教員と学生は、平素より斎藤先生の学識、教養、風采、文才を敬仰しており、訪台されるこの良い機会に、「斎藤蒼青の書」の展覧会を開催されるよう特別に邀請致しました。

この個展は、斎藤先生の近作の精品による展覧会であり、書法同道の士を広くお招きして、その芸術作品を共に享受できまことは、台湾芸林にとって一大盛事であります。ここに謹んで賀意を表します。

国立台湾芸術大学書画芸術学系主任 蘇峰男教授「序」

「書は心画なり」（揚雄『法言』問神）、「一字にして已に其の心を見（あらわ）す」（張懷瓘『文字論』）と先人が言うように、書法は東洋芸術文化の心霊の本源であり、また東アジアの漢文化における人文の風趣を伝承し発揚する表象である。書法と墨彩絵画は、質を同じく器を共にし、法は通じて境は会し、形象に借りて懷を澄ませて志を述べ、筆墨に託して情韻を抒へ、情性や理念を流暢に達するので、真に「道は自然に法り」て「芸は道に通ず」と言うことができる。

文化の淵源がその源を同じくし、質が同じで道が合うことにより、悠久な歴史の発展を経る中、書画芸術はずっと台湾と日本の生活文化における主要な芸道の精髓であった。中華の書学は広大に流伝して玄奥神妙で、明清以降は古典重視がさらに発展し、また日本の近代書道は新局を開き、心象幻想な別天地を涉獵した。

大東文化大学の書道は、歴史的に長い伝統を誇り、多くの大家が一堂に会して風範を垂れ、学術研究と芸術創作の兼修を重んじて優れ、日本の書壇発展の重鎮である。

斎藤公男（蒼青）先生は、大東文化大学で教鞭を執り、豊かな学識と卓越した創作観を持っている。その書作品は雄渾で莊重、筆使いは自由自在で動きが速く、風韻は古法の外にあつて生き生きとし、結構は幽邃微妙に交替し、情性が多感で溢れ出ており、真に自ずと風神が備わって、能書妙手を兼ね合わせている。長年、日本の大きな書道展で活躍しており、高い実力を持つ現代に傑出した書家である。

国立台湾芸術大学は創立五十周年を迎え、その間倦まず弛まず中華文化の伝承と再生の努力を続けており、なかでも書画芸術は最も傑出した成果を挙げ、数多の優秀な人材を輩出しており、現代台湾書画界の発展の中枢と称賛されている。

郷土の大世界に立脚して、異文化交流を促進し、他を借りて手本とすることは、長い発展にとって重要な道筋である。

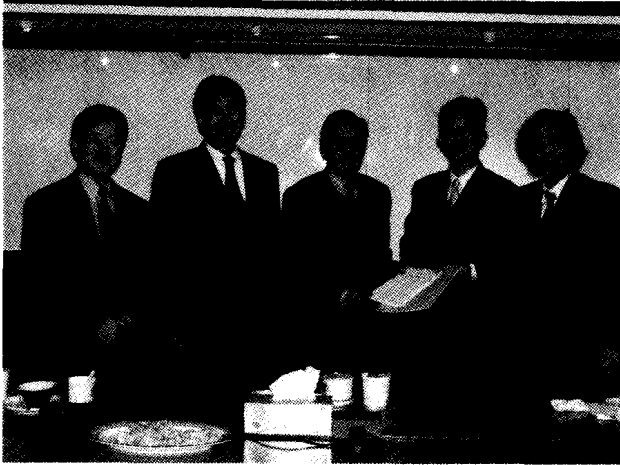
このたび本学は、縁有って個展「斎藤蒼青の書」を招聘し開催する。全教員と学生諸君および各界の書法愛好者にとって、鑑賞し学習する良い機会を提供するとともに、文を以て友と会う交誼を促進し、本学の輝きを倍増することになろう。ここに深く謝意を述べて、斎藤先生の卓越した芸術成果に衷心より敬意を表したい。

七、おわりに

台湾芸大との交流は、蘇峰男・林進忠という両教授の、ことばでは言い表せない、述べ尽くせないほどの、温かい心、厚い心によって成り立っている。自分の学生と分け隔てることなく、大東大の学生を尊重し、献身的に教学を担っておられる。両教授に接する機会をもつことができた書道学科の学生は非常に幸せであると思う。その幸せを忘れることなく、将来の自己の人間形成に役立てていただきたい。それこそが、最大の恩返しであろう。

最後に、両校の真の交流がさらに発展することを期して結びとする。

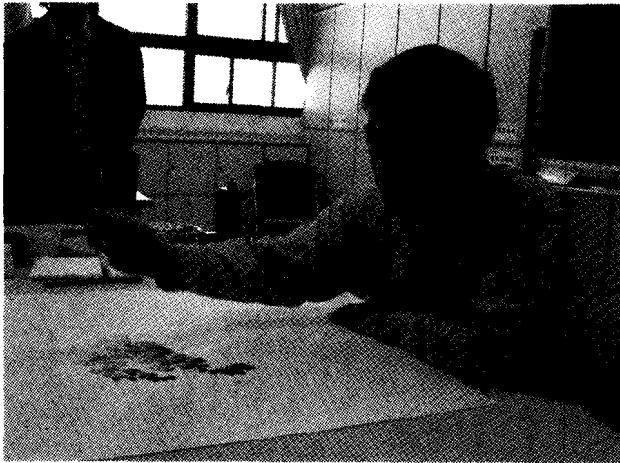
(二〇〇五年二月六日稿)



王銘顯前校長（春）



忠烈祠見学（春）



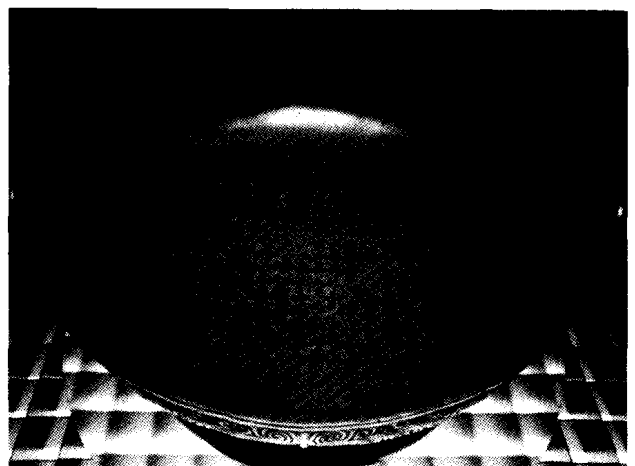
蘇峰男先生（春）



国際交流展会場（春）



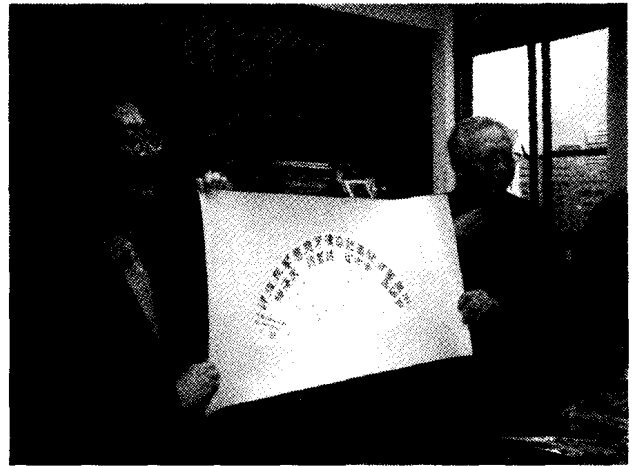
故宮三希堂（春）



散氏盤（春）



開校式（夏）



欧豪年先生と拙作（春）



宿舍入口（夏）



居延漢簡（夏）



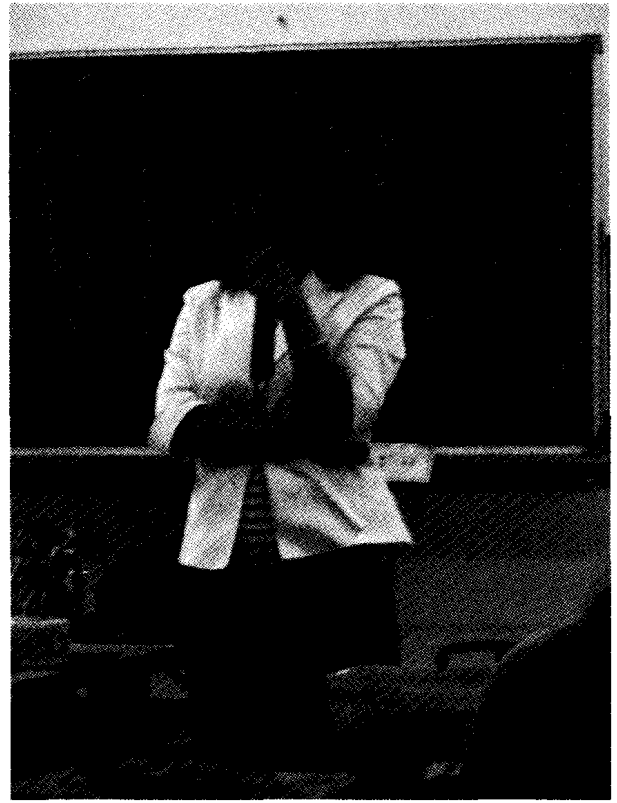
個展会場で（夏）



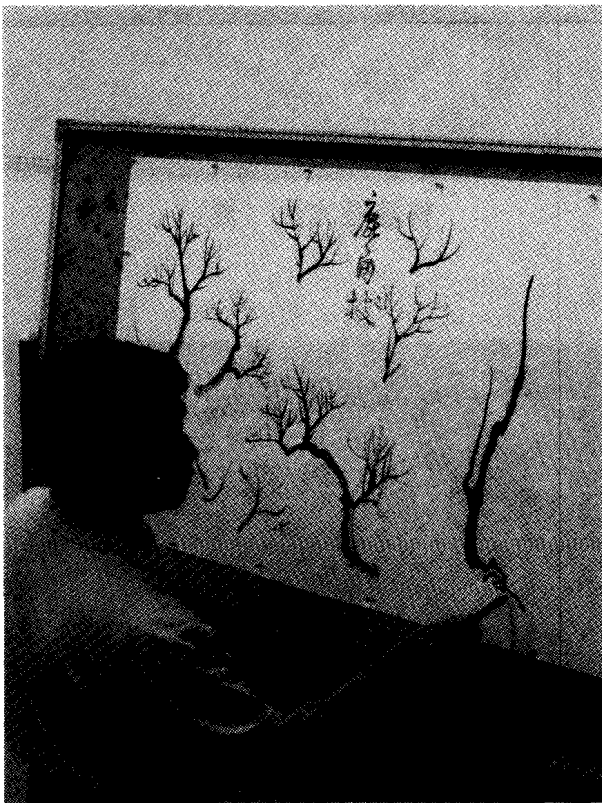
斎藤先生へ（夏）



林進忠先生 (夏)



劉素真先生 (夏)



羅振賢先生 (夏)



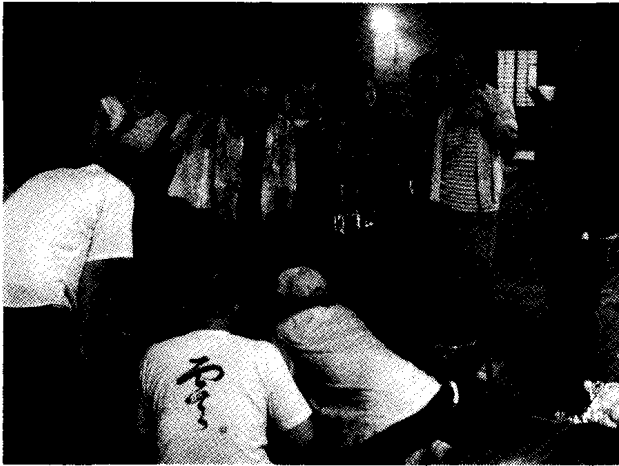
授業風景 (夏)



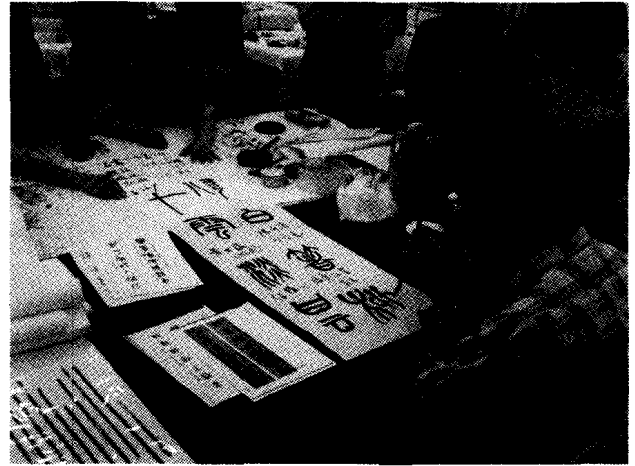
薛志揚先生（夏）



杜三鑫先生（夏）



バーベキュー（夏）



林隆達先生（夏）



お別れ（夏）



台湾芸大の学生諸君（夏）